

ニューヨーク植民地における都市民衆

——オルバニイの場合——

茨木 慶三

はじめに

先に何回か筆者は、ニューヨーク植民地における都市民衆（あえて一口でいえば、中小商工業者）の史的意義とその役割の重要性を指摘し、彼らについて二・三の試論を発表してきたが、^{注1}これまでは主に、ニューヨーク市民衆にのみふれてきた。しかし勿論、都市民衆は同市のみが存在したのではない。同植民地北部のオルバニイの場合も、軽視できないことは言をまたない。

本稿において筆者が、最近のビリンスキ氏（Stefan Bielinski）の論考に^{注2}依拠しつつ、オルバニイの中小商工業者をとりあげるゆえんはここにある。

一

ところで従来、オルバニイ植民地時代史においての毛皮交易の重要性が^{注3}強調されてきたが、その主張自体は正しい。確かに毛皮交易は、

ニューヨーク植民地における都市民衆

同地の成長を促進し、その主要交易者にビジネス相手のイロコイ族に対する特権的關係を可能にした。イギリスは、この外交上・経済上の利点を認識し、一六八六年同地を市として法人化、住民が五〇〇人以下のこの村に広い特権を交付した。^{注4}

しかし、同地を純然たる毛皮交易中心地と断定することは、同地の眞の姿を歪曲することになる。十七世紀末までに同地経済は、旧来の多くの史家の描写よりより複雑で、より巾広い要素から構成されるに至った。そのときまでに同地経済は、明らかに三つの関連する活動分野―商業（売買）、生産（製造・修繕）、サービス（給食・輸送）―から成っていた。^{注5}そして最近、ニューヨーク州立ミュージアムが計画した『植民地オルバニー社会史研究プロジェクト』^{注6}がもたらした情報によって、同地の社会経済的特性に関する新鮮な説明が可能なのである。

それはともかく、一六六四年のイギリス接収のとき、大抵の同地住民は、主として毛皮と他の商品との交換にかかわっていた。すなわち、オランダ領時代からの住民の多くは生産活動に従事していた。それは確かに、家族を扶養するためであったとはいえ、他方主に、十分な食品・繊維品・金物・工芸品を製造・保有して、毛皮を提供するインディアンの好む繊維品・酒類・鍋釜・銃を輸入できた対外的コネをもつ商業利権グループと毛皮交易で張り合うものであった。しかし一六六四年までに、毛皮市場の発展の型が変化したため、同地中小商人が毛皮交易で大商人と競うことがますます困難となった。すなわち、ビーバーはとりすぎのためその地域から事実上消滅し、西方インディアンから毛皮を手でできたイロコイ族と交渉することが必要となった。その上、ヨーロッパの毛皮需要が飽和点に達し、その後減少、一方、資力豊かなニューヨーク市企業家がオルバニー交易商家に臨時の足掛かりをえた。^{注6}さらにフランスが、毛皮提供動物の主源となっていた西部への自己の土地権限保護により熱心となった。これらが、毛皮問題での変化であった。^{注7}

このような状況のインパクトを感じて中小毛皮商人は、他の選択を考えざるをえなくなった。彼らの第一の選択は、再定住（転居）することであった。すなわち、スケネクタディの建立（一六六二）以下諸村が設立され、オルバニーの元来の移住民の半分が同地を立ち去った。また一六八〇年代までに、オルバニーの最下位毛皮交易者と成功した元来の移住民の子息は、より有力な毛皮交易商や、さらに、その後建設された農業地域の交付・開拓に従って発展したより一般的な市場にも、商品やサービスを供給することに気づいた。つまり彼らは、伝統的な活動への新しい応用を発見したのであった。^{注7}

一六六四―一七一三年に、展開した経済上のモデルに基づいて、オルバニー社会は、ニューヨーク北部地帯の指導的地位を再入手した。

オランダ領時代の毛皮交易商の最有力者―インディアンやより小さい交易者との親分・子分関係も培養することによって毛皮への接近を大にすることのできたスカイラー家 (The Schylers)、ウェンデル家 (The Wendells) などが、同社会の中核を占め、また、オルバニイ主要街路に居宅をもち、ぬきんでていた。イギリスが任命した諸総督は、彼らの成功を知しつし、彼らを地域の指導的職務に任じ、地方法廷の支配やインディアンとの交渉の独占を可能ならしめ、かつ、彼らの総督への実利ある忠誠に対してもうけの伴う仕事の付与や土地交付をもって報いた。

それはさておき十七世紀末までに、ハドソン河下流の交易者は、オルバニイを基地とする交易の主導権を放棄し、オルバニイの有力商家が同地からの毛皮輸出の支配権を固めた。しかし、これまでの下流へ毛皮を輸送したスループ型帆船は、オルバニイ大商人がよりもうかる輸出品であることを発見したハドソン・モホーク両河流域で生産された材木・小麦その他の商品をより積載するようになった。ために六〇年後の七年戦争末までに、毛皮交易はオルバニイの西方に転位し、少数の頑固な古顔だけが主にインディアンと交易する商人として確認されたにすぎなかった。インディアンとの交易者の人数は、実際減少した。一六六〇年、ビーバーウィック (オルバニイの元の名称) の人口が数百人のとき、毛皮交易者は約一〇〇名、オルバニイ市人口が八〇〇人以下であった一七〇〇年までに、七四人の商人が自己の毛皮交易権の保護を請願したのに対して、一七五六年に人口が二〇〇〇人以上に達したとき、毛皮交易者は十二人以下にすぎなかったといわれている。^{注8}

そもそもオルバニイは、一六六四―一七七四年の一〇〇年間に、エスカレートしたペースで拡大・発展しつづけた。すなわち一六六四年同地は、ぬかるみの流域氾濫地に位置する住宅一〇〇以下の村にすぎなかったが、一〇〇年後には、四〇〇以上の密集した建物、阜頭設備のある改善された河岸、そして製革作業場、灰がら作業場、練瓦・材木製作場、家畜囲い、倉庫、製粉場、および、牧場や市有地にある賃貸地を含む広大な施設のある内陸部を有する都市となっていた。さらに独立戦争期までに同市は、一〇〇年前には唯一のレーゾン・デールであると思われた毛皮交易の消滅にもかかわらず、三〇〇〇以上の住民のホームとなっていた。^{注9}

この成長は、主要商業利権グループによって展開された。いくらかの中小毛皮商人は大商人となり、同市周辺に住む隣人や農民の顧客に奉仕することができた。また、ヴァン・レンセレル家 (The Van Rensselaers) の番頭として来住した R・リビングストン

ン (Robert Livingston) のような新人実業家たちが、同市で身を立てることができた。彼らはその立身の過程で、ビジネス実行上の新基準を設定したのである。いずれにせよ、十八世紀中同地大商人は、農林業産物と交換で肝要な輸入品を提供することや、加工処理過程と輸送代理業への支配権をえること、および、辺境地に自己の利潤を投資することによって、主導権を保持しつづけた。大英帝国との闘争だけが、社会生活の全面での彼らの権勢を崩壊させえたのである。とはいえ、同市人口の増大につれて大商人は、その数の増加にもかかわらず、社会全体の勢力のなかでは減退する部分を象徴した。『植民地オルバニイ社会史研究プロジェクト』による伝記的研究によれば、同市の発展におけるより典型的な要因は、工芸・交易の成長とそれに従事した中産層の人々の名状できない出現であった。^{注10}

革命前の年間において、同市課税台帳などの資料で、勤労自由民層を確認できる。このグループは、退役軍人や同地の旧来の勤労者層を成す成人した生え抜きの子息とは異なっていた。それはともかく、植民地時代末までに同地勤労勢力の中核に、商品・道具・製造品を生産・修繕・供給・販売した中小商工業者がいた。すなわち確かに、これらのメーカーや修繕屋は、同村創設以来存在していた。しかし、同村がイギリス領となった以後の世紀に、これらのグループは、自耕自給農業や補助的な毛皮交易活動から出発して、同地経済部門の最大のものとなるに至ったのである。実際、工芸・交易は、革命前十八世紀の大部分の間、同市や家族にとっての主要経済活動の特徴づけるものであった。

同市を基盤とする生産活動は、オルバニイ農村地帯Ⅱレンセレーウィックから遠隔のモホーク流域やハドソン上流域の定住地に及び、萌芽的な定住農民が小麦他の穀類を育成し、家畜を飼育し、森林産物を収獲していた地帯Ⅱとは顕著な対照をなしていた。結局農村地域の産物の多くは、同市の倉庫への道を見出した。上流域ニューヨークの人口が増加するかぎり、加工品・工作された木材・皮革・金属・衣類・食料品への需要によって、工芸・交易活動において、子息や新来者は身を立てることができた。ただし、工作された品物の製造能力が増大したとはいえ、広範な基盤をもち、成長してゆく国内需要に遅れを取らないことは殆んどなかったのである。^{注11}

植民地時代オルバニーにおける工芸・交易の出現を理解する上で、同地の勤労住民に関連する次の三つの前提が中心となる。^{注12}すなわち第一は、同地住民が、毛皮交易後の生存の公算は、存在する才能や資源を新しい要請や条件に適用することにかかっている点を認識したからこそ、イギリス領時代の間同地経済は、生き残り、繁栄できたということである。第二は、輸送や人間的なサービスの提供者と貿易業者のみならず、同地中小商工業者が、同地の地理的位置、本国政府の同地域発展計画、辺境での最遠隔安全地としての同地の兵站上の立場（同地は、英仏第二次百年戦争におけるアメリカでの主要舞台）のゆえに利をえるユニークな地位にある点を自覚したことである。第三は、人口拡張地域での経済的機会の中心地としてのオルバニーの出現が、ヨーロッパ、他植民地、および、ニューヨーク植民地の同地以外の場所から、多数の能力豊かな移住民を誘引したことである。野心ある新来者は、植民地時代中、オルバニーのサービスと商業的風土に引きつけられた。彼らの最高の生産手段や実業上の条件と刷新の自覚によって、経済的階段の各階において最も成功した旧住民が獲得しようと競い求めた経済的企業のための永続するより高い標準が設定されたのである。

これらの要素のそれぞれ時々その一つ、しかしまた全部が結合して―が植民地時代中、同市社会に影響した。毛皮交易が衰えたとき、いくらかの交易業者は同市を立ち去った。しかし他の人々は、変化した条件に適応し、同市の特権的地位を利用することによって、生き残り、繁栄した。こうして、同市にとどまった最低の毛皮交易業者は、毛皮交易店を一般小売店に変え、後援者、顧客、親戚関係網に訴えて資材を入手し、長期間供給不足であった重要商品の入手可能（農林産物と工芸品の交換によって）をひけらかすことができた。毛皮交易がより活発なときには、また、これらのオルバニー住民は、毛皮と交換でインディアンに提供する工芸品を生産した。しかも、そのような工芸品や、金属・衣類・皮革・木材・食料品は、新しい村や定住地がオルバニー周辺に建立・発展させられるに伴って、需要でありつづけた。そしてこれら品目のどれも、十分な量を輸入できなかったし、また、同市の水曜・土曜日で売却するために自己の産物を持ちこんだ農民、百姓、加工業者の要請を満たすほど安値で提供されなかったのである。

以前毛皮交易のために粗ラシヤを縫い、裁縫師といわれた人々は、洋服屋ないしは常設の衣服仕立て屋となった（インディアン用裁縫師から、注文・卸売による常に関店する洋服屋への転換）。また、木材業、皮革業、食品業、金属工芸業などでも、顧客が、ヨーロッパからアメリカへの初期の移住民から土着アメリカ人に代わるにつれ、右の洋服屋に匹敵する移行がみられた。^{注13}

十七世紀末までに、なお同市に居住したオランダ領時代の八〇以上の家族のそれぞれは、毛皮市場から外れて欧米人の顧客のための生産を基盤とする工芸・交易に転換した一以上の世帯を有した。そのときまでに、オルバニイの残存のオランダ領時代の家族の大抵は、実業なしい生産志向者として概して特化することができた。実際、彼らのすべては、実業で成功できた一以上の親戚を示唆したが、そればかりか、多くの以前の毛皮交易従事家族は、圧倒的に生産事業に従事した。例えば、有力で多人数家族の一つヴァン・デン・バーク家（The Van Den Berghs）の場合、一大商家につき一二人以上の同市を基盤とする中小商工業者を有した。^{注14}

工芸・交易の実行は、そのルーツを毛皮交易全盛期に跡付けられるオルバニイ市住民に集中していた。またそれは、その強力な類似機能の基盤を特徴とした。例えば、鍛冶屋のフレデリックス（Myndert Frederickse）のようなくらかの人々と、その子孫の三世代は同じ職業にとどまった。ただし彼らは、事業を同市界を越えた地域に拡張した。なお、醸造業、皮革業、大工業などを営む他の家族も、植民地時代中、強い単一職業への献身を維持しつづけたのであった。^{注15}

ヴァン・デン・バーク家などは、生産志向活動における多様性を特徴とする大工芸・交易経営家族の典例であった。多くは、金属、織物、木材、皮革、および、食品調製で働きつづけることによって、最初の工芸一家の業務へのきずなをとどめたが、とはいえ彼らは、関連職業活動に分岐した。すなわち、例えば、大工は、おけ屋として働いたり、木びき、指物師、水車大工、車輛大工、船大工となった。また靴屋は、製革業者、より専門的靴屋、馬具屋となり、他方鍛冶屋は、細工師、釘造り、いかげやなどとなった。^{注16}

くわえて、オルバニイ中小商工業者はしばしば、その家族の技術を養子に伝え、養子は同市内でその職業で身を立てることができた。養子の家業への混入は、同市婦人の余所者の夫たちがめったに家業に受け入れられなかった状況と著しい対照をなす。実際、同市実業者層の娘の余所者との結婚は、その娘の誕生地からの転居のきっかけとなるのが通常であったのである。^{注17}

それはさておき、もともとからの同市中小商工業者だけが、同市の中小商工業を業としたわけではなかった。イギリスの接収後の年間に

同市に再定住し、すぐれた技術やサービスを同市経済にくわえることによって栄えた家族を設立した多数のオランダ領時代の移住民が、同市生まれの中小商工業者に合流した。これらの新来者の例としては、テン・アイク家 (The Ten Eycks) やド・ガルモ家 (The De Garmos) の人々、靴屋と銀細工師、ジャン・ナック (Jan Nach) 鋳床師、ヴァン・ザント兄弟 (Van Zandt brothers) 材木仕上げ屋などをあげることができる。

また、レンセレールウィックなどからの農村住民も、成長する地域中心地での工芸・交易のチャンスによって、オルバニイに誘引された。例えば、ブラッド家 (The Brads) 建築屋、運送屋、ド・フォリスト家 (The De Forests) 靴作り、フレンスバーク兄弟 (Flensburg brothers) 兄は靴作り、弟は大工であった。これらの人々は、衰えてゆく毛皮商人の転居を利用し、空屋を購入してそこにおける仕事場、鍛冶作業場、商店を開設した。彼らは、毛皮交易による繁栄を期待せず、ドンガン総督 (Thomas Dongan 在任 一六八三―一六八八) の特許状が同市自田土地保有権者に独占的に付与した特権、すなわち、地域市場のために物品を製造する機会の存在に引きつけられたのである。^{注18}

以上の同市中小手工業の中核は、農民と資材生産者、および、フロンティア開拓計画を開始し、オルバニイ要塞を建立したイギリス本国人に、技術とサービスを提供することができた。本国の計画は、二つの面で同市の工芸・交易を刺激した。すなわち、要塞用の建築材はこの地で入手でき、また大抵の建築材は、ミル・鍛冶場・商店・製造場の有用な板・建具・屋根に適合した。同地域の防衛突出部と公共建築物の維持は、オルバニイ当局の責務であったが、市当局は、負担をひとりで負うのを欲せず、防柵の保守・修繕・拡張の費用の提供を求めて本国政府に定期的に圧力をかけた。大工、鍛冶屋、燃料・ろうそく、靴の提供者によって大量に報酬勘定書が提出されたことは、同地建築業者が、十七世紀から十八世紀にかけての約五〇年間、要塞や防柵の建設・保存からもうけたことを示唆する。^{注19}

オルバニイ大商人が毛皮に支払った比較的高い値づけのために、非常に多くの土着アメリカ人の毛皮商人がハドソン河西岸の地域にやってきた。また彼らは、オルバニイの歓待によって、他地域よりもより好んで同地にきたのであった。例えば、同地教養施設の一つは、要塞の丁度北側に同市大工が建築・保存したインディアン小屋からなる小村であった。また、長年の同市の政策によって、インディアンが自己の銃、ポット、道具を同市の鍛冶屋にもちこみ、市費で修繕してもらったり、同市滞在中に同地産の食品を手交されることが奨励された。

これらのことは、同地中小商工業者への需要を付加し、彼らへの報酬は、市当局から補助されたのであった。^{注20}

ともあれオルバニイ人の丁重さは、毛皮交易消失後も継続された。対仏同盟者として望まれたイロコイ族その他に対する国王の懇請のために、多人数の土着アメリカ人が同地に來着し、定期的ペースで同地インディアン業務委員や勅任総督と会談した。植民地政府に支援され、同地の政府との契約者が提供したインディアンと勅任官吏への贈り物や歓待は、毎年の訪問でインディアンが勅任総督と会談するために同地に來着したとき、フロンティア外交の定例の様相であった。^{注21}

本国で徵募され、辺境防衛のために派米されたいわゆるイギリス独立守備隊によるオルバニイの要塞防衛によって、植民地時代の間に数百人の新しい人々がオルバニイにもたらされた。これらの兵士たちのいくらかは、アメリカでの軍役を新世界で身を立てるチャンスと考えた。一六七〇年代と一七二〇年代の間に、多数の元守備隊員が兵役後同地に好んでとどまった。少数の士官は、弁護士や医師としてぬきんでることができ、また、守備隊員のより小部分は成功した大商人となったが、退役軍人のより可能性の大きい職業は、飲食業であった。しかし滞米退役兵士の大抵は、工芸への従事、交易の実行、サービス業への応募によって、増加する同地域の完成商品への需要に見合う道を選んだ。これらの生産者の養成や資格については明らかではなく、またこれらのヨーロッパの青年が、高い技術を移入したという証拠もない。多分、チャンスがあったことが激励剤として役立ち、また経験が、教師となったのであろう。局地的に中小商工業者として知られた元兵士の第一の波は、一六七〇年代の町村名簿に現われ始める。例えば、一六七九年実施のオルバニイ世帯主調査によれば元兵士たち、ギルベルト (Tohn Gilbert, パン焼き)、ラブリッジ父子 (William Loveridge, Sr. and Jr., 帽子屋)、ガードナー (Robert Gardner, 醸造業者) が居住し、その後数年間に、いく人かの元兵士ないしその子息の中小商工業者がくわわった。^{注22}

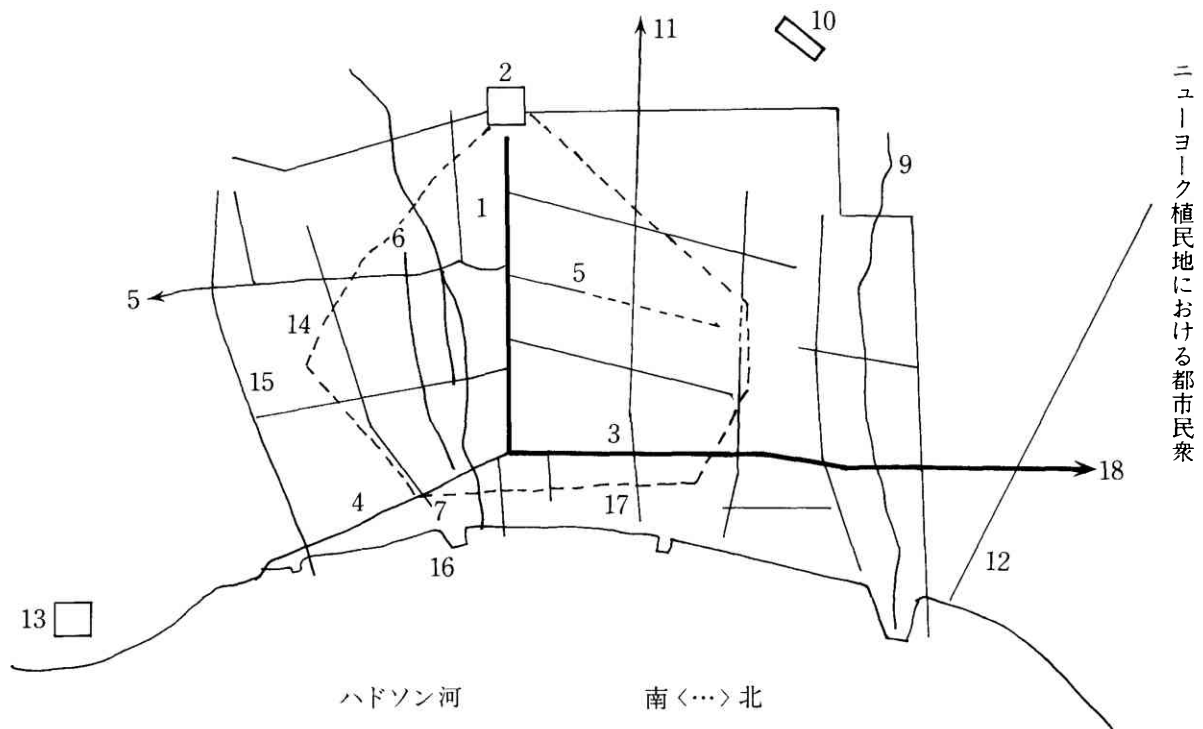
元兵士は、十八世紀初めにオルバニイに宣伝師を送り始めたキリスト教外国部普及協会へのみならず、オルバニイ他の諸辺境地要塞へ商品・サービスを提供することで、競争の上で明白に有利であった。これらの新定住者とその子孫は、やがて、オルバニイの衣服業、食品サービス業、接待業を独占するに至るであらう。彼らがイギリス出身という点や、なお英語が余りしゃべれない社会であった地域で目立ち、彼らの行動は、しばしば徹底的な近所のせんさくの対象となった。ただし、これらの中小商工業者となった元兵士のいくらかは、あらかじめ市会によってフリーメンとして承認されることなしに営業したため、罰せられたのであった。^{注23}

一七一一―四四年の平和期には、ニューヨーク・フロンティアへの定住が未曾有に拡大した。その期のオルバニイの発展は、新フロンティア区域が移民や旧ニューヨーク家族の子孫によって定住・開発されるのに伴う劇的な全面的植民の局部的な現われであった。フロンティアの発展が、オルバニイ市の得意先や顧客数を増すにつれて、同市人口は、十八世紀前半に倍化以上し、市のより古い家族のいくらかは、同市を基盤とする職業により多くの子息を就かせることができ、そのため以前は農村行を余儀なくされた青年を同市にとどめることができた。と同時に、便乗的な新来者が同市に定着した。そして同市の発展は、工作用木材、皮革、繊維製品への増大する地域需要によって新しい施設の出現が求められるにつれて、同市境界内の新区域の開発という形でなされた。^{注24}

〈市中心部〉 十八世紀二〇年代までに、オルバニイ住民は、開発に最適のエリアを完全に占有していた。北はフォックス・クリーク(図9参照)で、南はラッテンキル(図8参照)で境界とされた防衛柵の中央部の高く、それゆえ乾いた土地は、オランダ領時代からの家族によって独占されていた。同市は、これらの家族と最富裕新来者が、ステート(図1参照)・パール(図5参照)・マーケット(図3参照)・コート(図4参照)街道に沿って建てた商家から進展した。一七二〇年までに、これらの主要街道は継続して発展した。すなわちより堅固な練瓦家屋が、六〇年以上前に建てられた元の家屋にとって代わり、また修築された。この都会的居住中核区域での財産は、最高の地位、十八世紀の残余の間の実業中心区画を象徴することになる。練瓦造り家屋の所有者は、同市主要実業家、政治的・司法的指導者、社会的エリート、最富裕メンバーであった。一方、市中心部を取り囲み、隣接するより小さな建物の大多数は、二流商人と小売商人、輸送その他のサービスを提供した自由土地保有権者、出現しつつある工芸・交易経済の最も確立したメンバーの所有物であった。同市の付加的な土地は、将来の開発に一任されたが、それは、ステート街道から離れており、浸食された峡谷、ないしぬかるみの低地の近くに位置していた。

〈はいわゆる織り手の飛地〉 市中心部は、定住・再定住され、柵で囲まれていたが、一七二〇年までに市会は、中心部を越えた地所の開発請願を許可する意志であった。許可第一号は、先祖がオランダ領時代の住民ではなく、工芸・交易関連の生産活動を求めて最近来住した個

植民地時代オルバニ



〔註〕 破線はおおよそ17世紀の位置、

1 = ステート街道, 2 = イギリスの要塞(1676, 1737), 3 = マーケット街道, 4 = コート街道, 5 = パール街道, 6 = ギャロース・ヒル, 7 = 市役所, 8 = ラッテンキル街道, 9 = フォックス・クリーク, 10 = インディアン・ハット, 11 = スケネクタディへ通じるキングス・ハイウェイ, 12 = 市北界線, 13 = オレンジ要塞, 14 = 17世紀防柵, 15 = 18世紀の防柵のリミット, 16 = ドック(1765~70立), 17 = メイドン小路(渡し船乗り場), 18 = ヴァン・レンセレール・マナ・ハウスへの沿河道。

ーバルバカロ (Tricia Barbagallo) 氏作の略図 [AMS, 281]ー

人のグループであった。すなわち、一七二〇年に始まり、多数のこれらの抱負豊かな中小手工業者が、ギャローズ・ヒル（図6参照）のその場所（ステート街道の南方の斜面地。元来伝来の練瓦工場が占めていた。）の地権を入手した。例えば、機屋のフリーヤー（Isaac Fryer）、衣服屋のクーパー（Obadiah Cooper）などである。彼らは、著しく繊維関連業者であることが多く、この同市第一区のいわゆる織り手たちの飛地は、活発な地域市場に売るに十分な布地を生産でき、また、その多くが南部オルバニーに住宅兼商品をもつ一ダース以上の洋服屋を引きつけることができた。しかも、これらの繊維関係中小手工業者は、経営者が政治上無口にとどまった他の業種のどれにも似ず、市会に時折の発言権を有した。例えば、繊維関係業者テン・ブローック（Johannes Ten Broeck）とヴァン・ザント Jr.（Johannes Van Zant, Jr.）が、一七二〇年代と五〇年代の間に第一区から参事会員に当選し、同業者を代弁したのである。^{注25}

〈南部新地・低地〉 他方十八世紀前半の間に、新来者が市南部に移住しつつ、多様な工芸活動に従事した。またより専門化された職業では、元第一区の中手工業者や旧同家族の子息たちが彼らにくわわった。十八世紀半ばまでに、これらの手工業者は、その家屋が金属細工師や鍛冶屋の飛地の商店や小屋に触れるまで、市南部の古い道、ビーバーやハドソン街道を下って移動した。さらに、十七世紀の間に元来の移住民によって確立された一部旧家の鍛冶屋の家族が、植民地社会の南端近くの低地に位置していた。そして五〇年後には、イエツ（Joseph Yates）や、ホーガン（William Hogan）の子孫が、市南端に鍛冶屋を建立、植民地時代末までに一ダース以上の鍛冶屋が、市南部にある店で基本的な鉄製品を製作・修繕しつつあった。

彼らの数は、十九世紀にまでさえ増加しつつあったが、一七四〇年代以後には、ビジネス活動に変化をなす鍛冶屋はほとんどいなかったものの、ほんの僅かなものは、追加の地所を入手することができた。ただし誰も、参事会員となつて、政治的な名声を博すものはなかった。その代わりに、若い鍛冶屋は、巡警や消防士として奉仕し、また、土着アメリカ人の毛皮商人の道具や武器の修繕費の支払いを市当局に求めることができた。しかしこれらの金属職人の少数者は、のこぎり、たが、火器といったより専門的生産に移行することを好み、一方他の者は、真ちゅうや錫で実験し始めていた。グリーンやハドソン街道の新居住家屋が、煙や火の粉を出す鍛冶屋の仕事場を望ましくない近隣とみなすにつれて、仕事場は、鍛冶屋の住宅から離され、市端の牧草地に移転させられた。^{注26}

植民地時代の多くの間、市南部低地には、鍛冶屋の店とともに、大工、おけ屋、その他木材を原料とする職業に従事する中小手工業者の

店やまきの山が存在した。ボガート家 (The Bogarts) やビッサア家 (The Visschess) は、同市創立期からこのエリアで大工関連活動に従事していたが、十八世紀半ばまでに彼らに、多数のおけ屋、および、複雑な産物を作るために鍛冶屋、大工、木工細工師の技能への接近を必要とした荷馬車造りや舟大工たちがくわわった。オルバニー産の荷馬車やボート、そしてまたおけ屋が製作したたるや箱は、十八世紀の間に需要が増加した。植民地時代末までに、同市南部の生産活動は、建築業、車輛、船舶コンテナの建設を含んで、最も顕著な比率で繁栄した。^{注27}

〈北部市境地帯〉 同市の実質的北境は、フォックス・クリーク (図9参照) 山腹の間の広い峡谷を通り抜けたのち、泥水をハドソン河に放出する西行する流) であった。北マーケット街道の居宅や事務所のあるこのクリークの南部は、早くも一七六〇年代に、オルバニーの最も活発なビジネス世界を明示した。この商業地区自体は、同市の北半哩にあるヴァン・レンセレール・マナに至る道路をそこで横切ったフォックス・クリークが限界であった。^{注28} マーケット街道の大商家居宅と河岸との間の二つの小街区には、多数の中小商工業者の居宅や商店が位置していた。ここの中小手工業者は、大きい程度で木材関連業で働いたが、南部低地の木材関連中小商工業者が、大工業、ボートや車輛作りに専念していたのに対して、北部業者は、輸送品を守るのに使われた小たる、おけ、かご、箱を製作した。また彼らは、自己の技術を活用し、多分南部人より大きな程度で木材を曲げたり、形どったりして、荷馬車や船舶を製作した。さらにいくらかの木工細工師は、戸、よい戸、屋根板、その他の完成木製建築用品を製作した。くわえていくらかの第三区 (北部) の建具師は、いくらかのラフな家具を製作した。その上一七五〇年以後、ロープ作り、舟具屋、帆作りが、おけ屋と大工との間に小さな店を割り込んで保有した。手工業者のこの飛地は、メエドン小路 (図17参照) 渡船場と第三区ドックの間の河岸通りに沿って出現しつつあった河港エリアに最適に役立った。なお、ドック区の北端には、材木地区が形成され始め、北部森林で大量に筏採された松材や堅材がハドソン河を浮遊・流下され、低地で貯蔵された。^{注29}

ところで、植民地時代オルバニーの手工業者のなかで最も多人数であったのは、皮革業従事者であった。同地の有利な輸送上の位置のため、製革業者は、表面上無尽蔵な獣皮を提供してもらえた。またそのため、同市靴製作者や皮革商人は、移住民、旅行者、兵士、土着アメリカ人の顧客や、余剰品輸出のチャンスに関心をもつあらゆる人々の増加を期待することができた。靴製作とそれに関連する活動は平凡で

あったので、いずれの初期の主要な同市家族も、その職業に就く少なくとも一人の、しばしば多数の親戚をもっていた。大ざっぱな修繕からくらの綱引き荷馬車の精巧な修理に至る皮革作業は、大多数の青年に職を与えたが、彼らのいくらかはのちに、他の職業やビジネス活動に入っていた。同地工芸が市場向産物を製作したとすれば、それは確実に皮革製品であった。

それはともかく、製革作業は、社会に広く、また民族・階級を超えて普及していたが、住民の一部だけが供給や補助資材に適宜近づくことができた。毛皮交易網が、鹿皮や他の獣皮の断えざる補給を確保したため、インディアンとの交易を経験した家族、農村に親戚の結びつきをもち、また、同市に皮革を運ぶ手段をもつ人々が第一の有利さをもつことができたのである。その上、ホックス・クリーク沿いの地所とのちにそこに位置した製革作業場は、もっぱら既成有力家族に市政府によって譲渡・賃貸されたものであった。なおこれらは、その感受性が製革過程によりなれ易い青年によって典型的に操作された。ところで、好ましい値段で良質の皮革をえることが、個々の製革業者の成功を大にし決定する上で、業者の技倆の質とともに肝要であった。市場の条件を別にすれば、皮革業は、同地人の人気のある経歴選択であった。なぜなら、その部門に入ることは、道具、店舗、訓練のための投資をほとんど必要としなかったからであり、また皮革業者は、周期的景気サイクルにそんなに左右されることなく、それに大いに適応できる巧妙さを個々人に与えたからであり、さらに皮革業は、腐敗せず、容易に貯蔵できる産物を生産したからである。^{注30}

おわりに

思うに、世帯主と、生活のためではなくて外的に動機づけられた活動に熱中した従属する家族メンバーの人数という観点からすれば、中小商工業者は、明白な多様性を示し、初期オルバニー労働力の主力であった。同市での彼らの隣人や、同市周辺を含めた地域の住民が、彼らの布地、木材、金属、皮革製品、およびそれらに関連したサービスの定期的な顧客となる一方、いくらかの同地産物は、再販売のために輸出された。そして、これらのメーカーや加工業者の経済的業績のために、同市世帯のいくらかの大ブロックは、数世代にわたって生活を保障された。オルバニー中小手工業者は、家屋をもち、家族を養い、広範な社会活動に参加した。そればかりか、彼らのいくらかは、上昇

するペースで、メーカーや加工業者を雇用する人間、すなわち、商店主や大商人としての商業上・財産上の身分の保持者に向上することができた。

しかし総体的には、これらの生産勤労者層は、社会の指導者のなかに数えられなかった。植民地時代を通して彼らは、契約関係の上で、社会保護の上で、そして都市ないし社会の支柱として、消防士や巡警といった社会奉仕に親しく携わったけれども、彼らが参事会員に選出されることはめったになかった。一般に彼らは、民兵士官や治安判事にも任命されることはなく、また、課税額査定役、検査役、各種委員として行動することもなかった。さらに中小商工業者が、同市の内外で広大な地権をえることもめったになかった。臨終のときの彼らの財産は、実業者層のそれに比べものにならなかった。しかも彼らの最も覇気に満ちた子孫は、違った方向に出発するために、戦略上重要な決断を下した。十八世紀末までに、供給資材と製品市場化に対する支配権を保つことのできた少数者だけが、独立革命後にも、経済上の競争力を保ち、独立を維持したにすぎなかった。植民地時代手工業者の大多数は、オルバニー市を去り、より競争の少ない農村や新辺境地で自己の職業を実行し、あるいは退職して農業の仕事に従事し、または、工場・作業場所有者から賃銀をえる賃労働者となった。さもなくば彼らは、『恒常貧民』^{注31} になって施しをうける他はなかった。

以上要するに、オルバニー市民衆は、ニューヨーク市のそれに^{注32} 比べて、政治的・社会的上昇の程度が劣るようにみえるが、基本的には類似的の傾向を示唆しているといえよう。ただ同市でも、中小商工業者の史的意義と役割とを忘却してはならず、また、毛皮交易にのみ魅惑されてはならないことは明らかである。

註

- 1 筆者、『十八世紀におけるニューヨーク市カートメン』（大手前女子大学編集、第二〇号、一九八六）、107-24、とくにn.②。
- 2 Stefan Bielinski, *A Middling Sort: Artisans and Tradesmen in Colonial Albany*, New York History, (Hereafter cited as AMS) LXXIII, no. 3 (1992), 261-90.
- 3 Allen W. Trelease, "The Management of the Indian Affairs at Albany" in his *Indian Affairs in Colonial New York: the 17th Century* (1960), 204-27, etc..

- 4 Cf. Bielinski, *Government by the People: The story of the Dongan Charter and the Birth of Participatory Democracy in the city of Albany* (1986).
- 5 純然たる毛皮貿易中心地説は、Patricia U. Bonomi *A. Factious People* (1771), 39-53. の記述の限界を指摘、同地経済の内的分析の必要を説いた最初の著者は、David A. Aromour, “The Merchants of Albany, New York: 1686-1760”, Ph. D. dissertation, Northwestern Univ., 1965.
- 6 AMS, 264.
- 7 *メタメタメタメタメタメタ* Thomas E. Burke, Jr., *Mohawk Frontier: The Dutch Community of Schenectady, New York, 1661-1770* (1991), 21-3.
- 8 New York Colonial Manuscripts, New York State Archives, 42: 34; Edmund B. O’Callaghan ed., *Documents Relative to the Colonial History of the State of New York* (1854, Hereafter cited as NYCD), IV, 752-54.
- 9 Bielinski, “The People of Colonial Albany, 1650-1800: The Profile of a Community”, in *Authority and Resistance in Early New York*, ed. by William Pencak and E. Wright (1988), 1-26.
- 10 Bielinski, “How a city Worked: Occupation in Colonial Albany,” *Selected Rensselaerswijck Seminar Papers* (1988, Hereafter cited as SRSP), 122-4; Lawrence H. Leder, *Robert Livingston, 1654-1728 and the Politics of Colonial New York* (1961).
- 11 AMS, 270.
- 12 Cf, Gary B. Nash, *The Urban Crucible* (1979), 387-417; Stephen Innes, *Labor in a New Land* (1983); Billy G. Smith, “The Material Lives of Laboring Philadelphians, 1750 to 1800”, in *William and Mary Quarterly* no. 38 (1981), 163-202 and *The “Lower Sort”: Philadelphians People, 1750-1800* (1990).
- 13 個々の家族の職業については、SRSP, 199-24.
- 14 Bielinski, “The New Netherland Dutch: Settling In and Spreading Out in Colonial Albany,” in *The American Family: Historical Perspectives*, eds. by Jean E. Hunter and Paul T. Mason (1991), 5-14.
- 15 AMS, 274.
- 16 Ibid..
- 17 AMS, 274-5.
- 18 Ibid., 275.
- 19 NYCD, III, 216, 255, 260, 391, 429-30, 724; IV, 968; Leo Hershkowitz et. al. eds., *An Account of Her Majesty’s Revenue in the Province of New York, 1701-09* (1966), 44, 74; *The Colonial Laws of New York from the year 1664 to the Revolution* (1894), VOL, I-III.
- 20 Cf, Lawrence H. Leder, ed., *The Livingston Indian Records, 1666-1723* (1956); Peter Wraxall, *An Abridgment of The Indian Affairs* ed. by Charles H. McIlwain (1915); Hershkowitz, op. cit.; NYCD, V, 701; New York State Archives, XXXVIII, 160-93.

- 21 NYCD, III-V; Hershkowitz, op. cit.; Beverly McAnear, *The Income of the Colonial Governors of British North America* (1967).
- 22 Arnold J. F. Van Laer trans. and ed., *Minutes of the Court of Albany, Rensselaerswyck and Schenectady*, 1668-85 (1926-32), II, 396-7.
- 23 Pench and Wright ed., op. cit., 1-26.
- 24 AMS, 279.
- 25 Ibid., 280-1.
- 26 Ibid., 283-4.
- 27 Ibid., 284.
- 28 Ibid., 284-5.
- 29 Ibid., 285.
- 30 SRSP, 124-7.
- 31 『恒常食民』のリストは、一八〇〇年のオルバニー市の記録に現われ始める。
- 32 筆者、『独立宣言以前のニューヨーク市メカニック』（三重大学教育学部紀要、第三二巻、第三号、一九八〇）、63-7；筆者、『十八世紀アメリカにおける政治支配層に関して—とくに、ニューヨーク市・市会議員の場合—』（初等教育研究、第五巻、第二号、一九八一）、6-12。 [終]